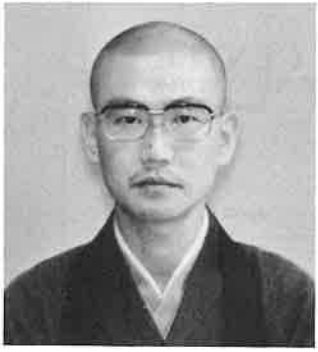
タイ留学僧からの現地報告

タイ僧伽へ加入するまで

田中　智誠



立命館大学経営学部卒業。
宇治黄檗山禅堂に掛錫、後滋賀県正瑞寺に入寺。
昭和24年鳥取県生まれ。

タイサンガに仲間入りさせてもらうには、しかるべき手順をふみ、社会的伝統行事の一つである得度式を経て可能となることです。

バンコック到着から得度式にいたるまでの経過を簡単にまとめてみました。

四月十八日

夕刻成田を発って、予定通りドン・ムアン空港に夜中着きました。空港へはＷＦＢ（世界仏教徒連盟）の名誉事務局次長の小谷亀太郎氏の出迎えをうけ、ワット・パクナムの僧院まで案内してもらいました。（ワット・パクナムはバンコック中心街より南西郊外トングリ地区にかる。）

私達の起居するクティ（僧房）は広大な境内の中の西端にあり、クロン（水路）沿いの三階建てのものです。割りあてられた部屋は東向きですので午前中は少し陽がさします。こちらは夏の盛りですから日中暑いのは当然ですが、夜間も寝汗をかくほど都変寝苦しいです。手や腕の表面がアセモだらけとなり、これから先どうなることやらと案じられました。

四月二十二日

ワット・パクナムでの四日目の朝、粥座（托鉢に出る比丘以外は朝六時より食堂にて四人一座となっていただく。）へ赴く途中、当寺院副住職のお一人、プラ・パーワナコーソンテーラー師に呼びとめられました。粥座・朝課後、居室に伺いますとパーリ語の僧名をつけるのに生年月日と曜日を聞かれました。その時、ウパサンパタ（得度式）は五月一日と知らされました。

日本出発前に得度式は五月中旬の満月の頃と聞いておりましたので、当初の心づもりより二週間も早くなったわけです。タイ僧伽で六ヶ月間の僧生活を体験された「タイの僧院にて」の著者青木保氏においてさえパーリ経文や問答型式の暗誦には三週間かかったとのこと。はたして一週間やそこいらで四十分相当のパーリ経文他を憶えきれるであろうか、大いに心配になってきました。気はあせれどもパーリ経文の暗誦はサッパリすすまない。時間は非常にも刻々すぎていく……。

出発前から食事のことも気にかかっていましたが、夕食の量を徐々に減らし固形物をとらないよう努力は払ってきました。同じ階で新参比丘の指導的立場の古参比丘サコン老僧より、得度式までの間、「夕食を用意してもよいがどうか？」と聞かれましたが、遅かれ早かれと思い十九日から非時食戒を随守いたしました。

四月二十三日

昨年お世話になったヴィトウーン氏を花市場があるテーウェート近くのオフィスにたずね、一年ぶりの再会を喜びました。帰りは寺までヴィトウーン氏の車で送ってもらいました。クティの天井にさがっているプロペラみたいな扇風機が故障しているのを見て、「こ

得度式の法衣の供養者

れではお困りでしょう。私に修理代を喜捨させて下さい。」とおっしゃられ、早速サコン老僧とネゴをはじめられました。そして当座用にと普通の扇風機をトンボ返りで持ってこられました。ヴィトウトン氏のこの態度（タイではこのような行為をタン・ブンと呼ぶ）にはまったくお礼の言葉も見いだせず、ただ感謝の念に頭がさがりました。（偏見かもしれませんが、大体タイ・ビルマでは、電気設備や装置などたんに据付けしたままで、日頃のメインテナンスやトラブル・シューティングがまったくなされてないようです。）現在、天井の四段変速扇風機（日本の地下鉄等にあるのと同じ）は修理され立派に作動しております。

四月二十四日

九時より約一時間、副住職を戒師として現地タイ人の得度式があり参観する。

四月二十七日

晩八時から九時半までピッチャイ師よりパーリ語の発音その他について指導を受ける。

四月二十九日

粥座・朝課後、ピッチャイ師よりパーリ語僧名を教えてもらいました。私は〝ウロラタノー〟だそうです。何か、自分がいつもウロウロしているからついた僧名

のような気がしました。パーリ語は意味は、ウロ（胸）＋ラタナ（宝石）からできているそうです。

五月一日

午前中は最後のパーリ経文暗誦に取りくむ。暑さで朦朧とするなか、難行苦行のすえ到頭くるべきところまできました。言うならば、まさに百尺竿頭に一歩を進めることが出来るや否や！というところです。

斎座後（食）、日本から持参したカミソリで梅田師を剃髪し、私はいつもどおり自分でやりました。午後二時には木村師が来てくれました。カメラマン役は当時逗留中の瞑想行者である中尾青年に頼みました。三時、布薩堂（本堂）そばのお堂で白衣に着がえてますと、小谷御夫妻もお見えになり、ダーヤカ（施主、普通は両親がなる）役のアカポンさん一家ともその時初めてお会いし、出家前でないと出来ない挨拶をかわし土産を渡しました。アカポンさんは家電製品を扱っておられる方で、日頃から三宝への帰依あつく機会あればぜひお世話したいと住職に申しこんでおられたそうです。

アカポンさんの行為（私ども日本人二人分の得度式の費用負担。）はタン・ブン（欧米ではメリット・メーキングというタームで紹介されている。）と呼ばれています。他にどのようなものがあるかといえば、

。自分自身に在家戒（五戒・八戒）を課し遵守すること。

。出家すること。

。比丘・僧院への寄進。

。親類縁者間やコミュニティ内での寄進。

等々です。

一般的にサン・ブンといえば、僧院ならびに比丘への財施であり、それは「積徳」と言うよりも「徳の獲得行為」として今生におけるカンマ（業）の向上を計る目的で行なわれるようです。「不徳を為すことによって生ずる対立観念を相殺せんがための積極的意味あいがタン・ブンにはこめられているのかもしれません。

さて、得度式はまず十五分位前に、友人・知人が少なかったため白衣のメチーさん（寺で八戒を守り奉仕

法衣の供養を受ける

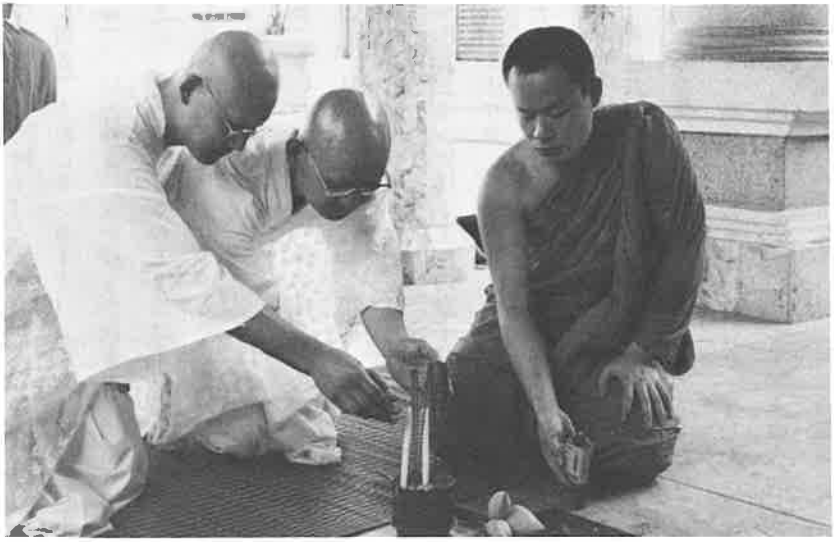
活動をされる女性信者をメチ！と呼ぶ。）二十人位を頼んで僧衆へのお供物を持って先導してもらい、その次を施主・知人が戒師・知人が戒師・羯磨・教授へのお供物をささげ、最後に我々が蓮華を献げもってウポサタ（布薩堂＝本堂）の周囲を三回右まわりして三宝帰依を表します。この際ドラ・タイコなどの鳴物入りで踊りながら回る場合もあります。九つある霊的礎石の一つで本堂正面にある結界標石＝戒壇（シーマーと言って、これがあるワットだけが得度式ができる。）の前で献香・献華・点燭し跪坐三拝、起身起立合掌して唱文そして一拝三拝唱文を繰り返し本堂へ入り、又同じような動作がはじまります。戒子の姿勢は起身合掌、跪坐合掌（跪いて踵を立てる）に、本堂内での進退は胡跪（長跪）が基本となります。三拝は跪坐合掌の状態での三拝です。両腕とも肘から指先まで完全に地面につけ、掌は地面に伏せます。したがって、両膝・両手に額で五体投地というわけです。

本堂内では、二十数名の僧伽を前にして出家を乞い、

アンタラワーサコー（腰巻）、ウッタラーサンコー（黄衣）それにサンカーティ（黄衣を折りたたんだもの）、いわゆる三衣を授与されます。次に三帰と戒を乞い、それを授与されると次は十戒です。ここでやたら長い文句があり少々つかえてしまいました。次にニッサヤム（所依・依止）を乞い、パッタン（＝バアツ・鉢）をいただき三衣一鉢の確認。次に十三項目の間障碍法。具足戒授与の請願。羯磨・教授による羯磨文の表白誦出等がつづきます。以上のような式次第はラーマ四世（モンクート王）の皇子ワチラヤン親王（ワチラナーナワローラサ）によって一九一六年に改訂されたものが今日行なわれている得度式の土台となっているそうです。

得度式のなかで、私が最も興味深く感じたことは、功徳水を使って出家受戒得度によってもたらされる功徳を先亡霊位も含めすべての存在、すなわち普く一切に及ぼし回向するということです。その合図として金属の水瓶に入った水を別の器（黄檗の瑜伽焰口（大施

餓鬼）で使用する酒水器（シャスイ）と同じもの。）に移注し、その功徳を先亡霊位、両親・親族一同にふりむける、回向するという象徴的儀式として最後を飾るにふさわしいものでした。そのあと新比丘は親族等から生活用品等のお供物を献じられて式終了となります。結局この日の得度式は一時間半位かかりました。普段の勤行で合掌していると自然と力がぬけて合掌の姿がくずれるものですが、そういうこともありませんでした。禅定と三密のはたらきによってと言うべきなのでしょうか、お蔭さまでタイ僧伽入りは成就いたしました。精一杯に取りくみ、成りきったところに仏弟子として勝縁をいただいた姿があるのではないでしょうか。もちろん今回は私の身内や知人は式に参観しておりませんが、その場におられた関係各位の方は一様に随喜していただいたと信ずるものであります。



堂前で点燭